

塩尻市「えんぱーく」視察概要

- 1 開催日時：平成25年10月1日（火） 午後1時～3時10分
- 2 視察先：長野県塩尻市「えんぱーく」（市民交流センター）
- 3 参加者数：35名

駅前複合施設基本設計ワークショップメンバー	14名	} 20名
駅前複合施設基本設計審査会委員	6名	
(株)佐藤総合計画（設計業者）	2名	
事務局・図書館担当者	13名	

4 内 容

- (1) えんぱーく施設概要説明（15分）
説明者 伊東図書館長（市民交流センター次長兼務）
- (2) 3班に分かれ、施設内見学・説明（60分）
- (3) 質疑応答（25分）
- (4) 館内自由視察（25分）

【えんぱーく施設概要説明（伊東図書館長）】

えんぱーくは平成22年7月29日にオープンし、開館から4年目に入ったが、既に来館者数は200万人を突破している。

えんぱーくには図書館、子育て支援・青少年交流、市民活動支援等の機能があるが、行政の縦割りでは限界があり、当施設は、「機能融合」を目標として整備検討を進めてきた。ここでは図書館と子育て支援センターが同じフロアでデスクを並べて仕事をしており、ハード面で機能をつなげるとともに、ソフト面からも機能を可能な限り補うとしている。

この考え方は市民から賛否両論があったが、市民から見て、行政は何をサービスとして行うべきかを突き詰めていくと、このような建物に成らざるを得なかった。それを利用者は「開放的」という言葉で表している。壁で部屋を仕切ることを極力避け、「壁柱（厚さ20cm）」という構造体により整備することで、フロアごと、部屋ごとに

機能を分けるということはしなかった。セキュリティ面では機能ごとに分けることが正しいのだが、あえて仕切りをこじ開け、運営面で対応している。

「機能融合」とは、「ある機能を一つのことに使うという目的のために、置かない」ことを原則としている。例えば、施設内に「お話コーナー」を設置しているが、お話コーナーとしての利用目的しか持たせなければ、1週間の内、数十分しか用が無い場合もある。当然、他の部屋と隔てた「お話コーナー」が欲しいという市民意見もあったが、あえて、「お話コーナー」を他の時間は開放して、子供たちが寝ころびながら本を読む場としても利用できることとした。コピー機についても、職員と市民が一緒に使うこととしている。

あるスペースは図書館側から見れば学習室であり、昼の読書コーナーでもあるが、別の目的では、ボランティアルームであり、お話スペースや飲食スペースでもある。

この建物約 11,000 m²のうち、約 3,300 m²が図書館だと言われているが、図書館の事務室も 3,300 m²の中には含まれない。なぜかという、その機能が他の施設の機能と重ね合わせることができるからであり、「お話コーナー」で本が読みたければ、本を借りて、その部屋に行って読めばいい、図書館に用の無い人もその部屋でお話をしてもいいという考え方で、図書館だけの機能は必要ないという考え方としている。

ボランティアルームについても、ボランティアの人だけがその部屋を専有するのではなく、他の人の交流スペースとしても使うという考えである。飲食についても、図書館の約 3,300 m²以外では全て飲食可能としている。(一部の部屋は飲酒可能)

これは、図面を見ながら、3,300 m²が図書館だという作り方ではなく、全体の 11,000 m²を見ながら、会議室を自習室としても使えるのであれば、運用面でその部屋の貸し借りは効率的に総合カウンターでできるようにしようという発想で作ってきており、この考えが施設の随所に入っている。

配布資料にあるが、検討の経緯については、平成 15 年からワーキンググループによる検討を開始し、平成 22 年の開館まで議論を重ねてきた。最初の 2 年間にいたっては、議論の回数は年 30 回以上にのぼり、この議論の中には、施設建設の反対運動も含まれている。今となつては、反対する市民意見を更に乗り越える施設をつくった経緯につながった。

図書館としてはより多くの本を貸し出すことが目標ではなく、多くの人に使って

いただきたいとの思いであって、一部の反対する人たちの意見をも包み込める利用施設になったと考えている。

【質疑応答】

(質問者 1)

えんぱ一く内にハローワークが入っているが、依頼して入ってもらったのか。

(伊東館長)

松本にあるハローワークの支店として、以前、市庁舎のとなりに建物があつたが、耐震化の関係から引っ越し先を探していた際に誘致したものである。

(質問者 2)

松本テレビも同様の経緯か。

(伊東館長)

松本テレビは塩尻市に支店はなかったが、えんぱ一く建設にあわせて営業用オフィスを設置した。

(質問者 3)

経緯説明資料に「えんぱ一くらぶ」という団体関わっているが、施設の検討段階から関わってきたのか。また、この施設の企画・運営にどのようにかかわっているのか。

(伊東館長)

平成20年に「サポート組織設立準備会」を設置し、えんぱ一くの運営に際しては、「行政の行うサービスはどんな部署が入ろうが、一つのサービス体として運営することとした。この「機能融合」という考えは、施設だけでなく、イベントについても同様であり、各部署ができる内容を各々持ち寄って一体的に行っている。

えんぱ一くにおける、市民活動においても意見の対立がよくあることから、「えんぱ一くらぶ」は、市民が一つになって活動することを目的に設置しており、えんぱ一くで活動するボランティア団体は「えんぱ一くらぶ」に属さなければならないこととしている。

図書館ボランティアは図書館のためだけに活動するのではなく、交流し協同することを狙いとしており、団体の拠点は一か所にまとめ、そこから各施設へボランティアに行くスタイルとしている。

ちなみに「えんぱーくらぶ」は「えんぱーく LOVE」から付けられた。

ただし、独自の活動をしたい団体も当然あるので、試行錯誤しながら、運営している最中である。

(質問者 4)

図書館は静謐で落ち着いた空間であるべきだと考えているが、えんぱーくは静謐さを保ちながら、施設の活性化を図る目的に対してどのように取り組んできたのか。

(伊東館長)

当初から、図書館は利用者を増やしたいとの考えで整備を検討してきたが、図書館が静謐な場所というのは読み物を中心としたハードユーザーの考えであり、市民の10%~15%程度である。それを30%~50%の利用者に増やすためには、今の3~5倍の利用者を受け入れなければ達成できず、その場合は、今の静かな図書館を保ってられない。

ヨーロッパの図書館を視察すると、国民の5割が図書館を利用しているが、施設内は賑やかで議論するスペースも設けられているが、静かに本を読みたい人には静かな部屋が用意されている。

日本の図書館の常識では大きな発展は望めないとの考えから、えんぱーくの整備では、市民交流を進め、遊びと読書を混ぜ合わせた図書館をめざす覚悟を決めたので、音を遮断するような部屋のつくりはしていない。

ただし、1階の奥には、一番高級な椅子を備えた、一番静かな場所を設けている。

また、道路側の賑やかな場所には、子育て支援センターや児童コーナーを設けたり、吹き抜けから上階の音がもれないよう、厚いガラスを設置するなど、設計に配慮している。

人が交流し、賑わってほしい考えについて、オープン当初は批判的な意見もあったが、それ以上に利用者は増える結果となり、新しい利用者が訪れる図書館が作れたと考えている。

(質問者 5-①)

伊東図書館長がリーダーシップを発揮し、市民との対話により困難を乗り越えてきたと思うが、今までどのような困難があったのか教えてほしい。

(伊東館長)

困難はいろいろあったが、我々が直接関わるができなかったことは、施設設計者は審査会で議論して選定したため、図書館建設の実績のない者が設計者となったことである。そこで、施設の検討にあたり、工事の直前まで議論を続けてきたが、それは皆さんと同じだと思う。事業が終わるまでは、議論を続けて欲しいし、意見を受け、発する、そしゃくする作業を完成まで続けていただきたい。

また、施設設置の反対運動の対応に2年間を費やしたが、反対者の意見をどう反映したかが大事だと思っている。

検討に関わった皆さんが、施設利用者に対して、こういう思いで作ってきたと伝えていければ、市民に愛される施設になっていくと思う。

(質問者 5-②)

建設場所を決める際に市民アンケートは取ったか。

(伊東館長)

もともと市の土地があった場所である。市街地整備事業の際に17人の地権者がおり、その内の一人が市であった。

(質問者 6)

子育て支援センターの面積は、当初の構想段階からのものか、それとも図書館との協議で決まったのか。

(伊東館長)

最初からではない。基本構想の段階では、別の場所にあった。配置の検討の際に図書館と子育て支援センターが連携するかどうかを決め、配置と面積を決定した。

現在の位置は、裏口に駐車場があり、入口から近いことから決定した。

(質問者 7-①)

子育て支援センターとプレイルーム「あ・そ・ぼ」の関係は。

(伊東館長)

プレイルーム「あ・そ・ぼ」は子育て支援センターの管轄下にあるが、対象は6歳までで、原則、親の付き添いが必要としている。えんぱーくの児童コーナーで遊ばせる親もあり、選択による使い分けだと考えている。

(質問者 7-②)

プレイルーム「あ・そ・ぼ」も「えんぱーく」とあわせて計画されたのか。

(伊東館長)

違う。平成22年7月にえんぱーくがオープンしているが、その前年の夏にイトーヨーカドーの撤退が決まり、それまで、えんぱーくと商業施設の連携による市街地の活性化を計画していたが、計画変更を余儀なくされた。

市も撤退後のテナント誘致を進める一方で、プレイルームの設置要望が前々から寄せられていた経緯を踏まえ、急きょプレイルーム「あ・そ・ぼ」を設置し、平成22年8月にオープンした。